

平成 22 年 5 月 28 日現在

機関番号：3 2 4 1 3

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：2 0 7 3 0 4 0 5

研究課題名（和文） 日常生活における欺瞞性認知

研究課題名（英文） Perceived deceptiveness in everyday life

研究代表者

村井 潤一郎（MURAI JUNICHIRO）

文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号：50337622

研究成果の概要（和文）：日常生活における欺瞞性認知の一端を明らかにするため、研究参加者 23 名に IC レコーダーを 1 週間携行してもらい、日常生活で欺瞞性認知が生じた際、その内容について録音するよう求めた。欺瞞性認知の平均回数（1 日平均）は 1.53 回であった。次に、以上で収集された欺瞞場面から 7 場面を抽出し、研究参加者 82 名に対し質問紙調査を実施した。最大の欺瞞度を示したのは、店員と客のやりとりの場面であり、最小の欺瞞度を示したのは、授業が始まる前の着席行動に関する学生同士のやりとりの場面であった。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：欺瞞性認知，日常生活，対人コミュニケーション，日記法

1. 研究開始当初の背景

(1) うそに関する研究は、学問分野を問わず本邦では少ないのが現状である。しかし、うそは対人関係を円滑化する一方、様々な軋轢を引き起こす場合もあり、日々の生活に様々な形で影響していると考えられる。

うその中でも、本研究で特に注目するのは、日常的な言葉を敢えて使うとすれば「言葉のうそっぽさ」という主観性である。「うそっぽさ」とは、「実際にうそかどうかは分からないが、何となくうそであると感じる」という意味内容である。我々は、普段の生活で、

他者の発言を「うそっぽい」と認知する。この「うそっぽさ」を「欺瞞性」(deceptiveness)と呼ぶ。こうした感覚は日常的なものであるが、欺瞞性認知がどのような要因によって生じるのかについて、「何となく欺瞞的」といった感覚的説明ではなく、明確な説明をすることは困難である場合が多い。言葉の中のかなる要因によって欺瞞性認知が生じるのか、この点について実証的検討を加えた研究は、とりわけ本邦ではほとんどみられない。

なぜ「言葉の欺瞞性」なのか。正直に発した何気ない一言が、意に反して欺瞞的である

と認知されてしまうこと、これは話し手にとっては極めて不本意なことである。その最も劇的なケースは冤罪であるが、そうしたケースに至らないまでも、欺瞞性認知の生じる源泉について明らかにできれば、日常の誤解を少しでも減らすことができよう。

(2) 本研究では、日常のコミュニケーションにおける欺瞞性認知の様相の一端を明らかにする。これまでの欺瞞性認知研究は、各種要因によって欺瞞性認知が生じることを、主として質問紙実験を通して示してきた(村井,1998ab,1999,2004,2005,2006)。これを逆手にとれば、「上手なうそのつき方」になるかもしれないが、何よりも「無用な誤解を避ける」という意義がある。こうした欺瞞性認知に関する知見、とりわけ本研究のように日常に根ざした知見を積み重ねることで、日々のコミュニケーションに有益な知見が提供できるだろう。例えば、「曖昧な言い方が欺瞞性認知を高める」ことは、これまでの欺瞞性認知研究で繰り返し確認されているが、この知見は「曖昧なものの言い方を下手にしまうと、うそつきのレッテルを貼られる可能性が高まる」ということになる。普段から曖昧なものの言い方をする人は注意が必要であろう。初対面で、うそつきのレッテルを貼られてしまいかねない。うそをついていないのに、うそをついていると思われることほど不本意なことはないだろう。こうしたことを防ぐために、本研究は役立つと考える。

(引用文献)

村井潤一郎 1998a 話し手と聞き手の関係が発言内容の欺瞞性の認知に及ぼす影響 計量国語学,21,162-169.

村井潤一郎 1998b 情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性の分析 心理学研究,69,401-407.

村井潤一郎 1999 恋愛関係において発言内容の好意性が欺瞞性の認知に及ぼす影響 心理学研究,70,421-426.

村井潤一郎 2004 発言内容の欺瞞性認知—公準の複数違反で欺瞞性は高まるか? パーソナリティ研究,12,116-117.

村井潤一郎 2005 強調語が発言内容の欺瞞性認知に及ぼす影響 パーソナリティ研究,14,92-100.

村井潤一郎 2006 強調語と疑念が発言内容の欺瞞性認知に及ぼす影響 社会言語科学,9,59-66.

2. 研究の目的

(1)研究1：日常生活における欺瞞性認知の一

端を明らかにするための日記法調査を実施した。村井(2000)は、日記法(RIR:Rochester Interaction Record, Reis & Wheeler,1991)を用いて、“青年は1日に何回くらいうそをついているのであろうか”“うそだと思っ瞬間は1日に何回くらいあるのだろうか”,という点について検討している。青年(大学生・大学院生24名。男性12名,女性12名)に1週間日記を携行させるという方法を取り、日常生活において、欺瞞的行動(うそをつくこと)及び欺瞞性認知(うそだと思っこと)がいかなる様相を呈しているか,という点について検討したわけであるが,1週間日記を携行し事象が生起するたびに日記に記入するという手続きの煩雑さは否めない。そこで本研究では、筆記式の日記に代わり、ICレコーダーを携行させるというより簡便と思われる手法を用いて、日常生活における欺瞞性認知の記録を求めた。

(引用文献)

村井潤一郎 2000 青年の日常生活における欺瞞 性格心理学研究,9,56-57.

Reis,H.T.,& Wheeler,L. 1991 Studying social interaction with the Rochester Interaction Record. Advances in Experimental Social Psychology,24,269-318.

(2)研究2：研究1で収集された、日常生活に基盤を持つ欺瞞場面をもとに、各場面の欺瞞度を検討する(集団形式の質問紙法)。その他、個人差変数との関連についても補足的に検討するために、一般的信頼を取り上げる。一般的信頼については、村井(2005)でも取り上げられているが、顕著な結果は見られなかったとは言え、欺瞞性認知と一般的信頼との間には弱い負の相関が一貫して認められた。

以上、各場面の欺瞞度という情報を得ることにより、さらにまた一般的信頼という個人差変数と絡めることにより、今後の欺瞞研究において仮想場面を用いる場合の基礎的資料を提供することとなる。

3. 研究の方法

(1)研究1：大学生の研究参加者23名(男性7名,女性16名)にICレコーダーを1週間携行してもらい、日常生活において欺瞞性認知が生じた際、生起後なるべく早くに、その内容についてできるだけ正確に録音するよう依頼し、1週間の日記携行期間終了後、個別に面接を行い、気づいたことなどについて内省報告を求めた(事後面接)。提出は音声ファイルではなく、内容を記載したExcelのファイルのみであった(倫理的配慮)。ICレ

コーダーについては、研究参加者自身によって中身を削除の上、返却を求めた。研究参加者には、事後面接終了後謝金が振り込まれた。なお、調査は3期に分けて行われた。

(2)研究2：上記の研究1(日記法調査)で収集された欺瞞場面から、質問紙にて提示可能な7場面を抽出し、欺瞞度評定を求めた。欺瞞度項目は、各場面につき「本当っぽいーうそっぽい」「不誠実なー誠実な」「信用できないー信用できる」「正直なー不正直な」の4項目であり(7件法によるSD法)、これらについて評定を求める質問紙調査を実施した。欺瞞場面は、

場面1：「Aさん(女性)とBさん(女性)は大学で同じクラスの友人です。授業が始まる前に、Aさん(女性)が座ろうとしていた席にBさん(女性)が座ってしまいました。そのことにBさんが気づき、謝ってからどうしたとき、AさんはBさんに「えっいいいよ。そこの席座っていいよ。」と言いました。」

場面2：「Aさん(女性)とBさん(女性)は大学で同じクラスの友人です。Aさんは、Cさん(男性)に想いを寄せています。Aさんは、Bさんとの会話中「早くCさんと飲みに行こう。Bさんと遊びたいよ。」と言いました。」

場面3：「Aさん(女性)とBさん(女性)は大学で同じクラスの友人です。AさんとBさんが一緒に勉強をしている時、Bさんが、Aさんに分からないところを教えていると、AさんはBさんに「すごいね。尊敬しちゃう。」と言いました。」

場面4：「Aさん(女性)とBさん(女性)は大学で同じクラスの友人です。AさんとBさんが一緒に授業を受けている時、AさんはBさんのせいで先生に注意されてしまいました。AさんはBさんに「気にしなくていいよ。」と言いました。」

場面5：「店員(女性)とAさん(女性)の会話。Aさんが、先日買った商品を返品しお金を受け取って店を出る時、店員が「是非またご利用下さいませ。」と言いました。」

場面6：「Aさん(男性)とBさん(男性)は大学で同じクラスの友人です。授業後、AさんはBさんに「今回のレポートきついから、手を抜くな。」と言いました。」

場面7：「店員(女性)とAさん(女性)

の会話。Aさんが服を試着した時、店員が「お似合いですよ。」と言いました。」

であった。

研究参加者は82名(うち、明らかに真面目に回答していないと判断されるオブザーベーション3件を削除したので、実際の分析対象はn=79。男性29名、女性50名)であった。なお、質問紙の最後には、個人差変数の測定として、一般的信頼尺度(山岸, 1998)を設けた。

(引用文献)

山岸俊男 1998 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム— 東京大学出版会

4. 研究成果

(1)研究1：研究参加者23名の欺瞞性認知の平均回数(1日平均)は1.53回(最大4.71回、最小0回、標準偏差1.02)であった(参考までに、表1には、男女別の基本統計量を記載した)。この値は、研究参加者ごとに算出した「1週間の平均」の平均である。なお、最小の「0回」であるが、1週間まったく欺瞞性認知の生起が観測されなかった研究参加者が1名いた(女性参加者)。

表1 男女別にみた欺瞞性認知の生起回数の平均(SD)

	生起回数の平均(SD)
男性(n=7)	1.59(0.89)
女性(n=16)	1.51(1.10)

村井(2000)では、自分がうそをつく回数の1日平均は男性1.57回、女性1.96回、欺瞞性認知の回数の1日平均は男女とも0.36回であったが、本研究で得られた結果は、村井(2000)の「0.36回」を上回るものであった。調査年の差という年代的要因もあろうが、筆記式の日記法を用いるのか、本研究のようなICレコーダーを用いるのか、という研究方法による差もあろう。本研究では行わなかったものの、「うそをつく」方についても記録させると、同じように、従来の筆記式の手法よりも、回数は上回ると推測される。いずれにせよ、村井(2000)同様、欺瞞性認知(うそだと思ふこと)は、欺瞞的行動(うそをつくこと)に比して生起回数が少ないと予測される。

性差に関して言えば、表1のように、ほとんど差は認められなかった。この点は、上述のように村井(2000)においても確認されている。欺瞞研究においてしばしば性差が報告される中、このように性差がないという結果が繰り返し見出されていることは興味深

いと言えるだろう。

以上は、欺瞞性認知の生起回数についての分析結果であるが、研究参加者から提出された Excel のファイルには、実に多様な欺瞞場面が記載されていた。これまでの欺瞞研究で用いられてきた仮想場面と比較すると、日常生活に根ざした「些細」なものが多く、大学生が日常の些細な場面で欺瞞を感じ取っている様子をうかがうことができる。もちろん、これまでの研究においても、例えば渋谷・渋谷 (1993) は多くの欺瞞場면을収集しているが、回顧的に記述されたものであり、いわば「オンライン性」に欠けるものであろう。また、古屋 (1991) は、欺瞞場面を用いた研究を行っているが、そこで用いられている場面は、必ずしもすべてが一般的なものであるとは言い難い。研究参加者にとって感情移入の困難な場面を用いた欺瞞研究では、実態から乖離してしまうだろう。対して本研究では、日常生活で記録された場면을収集できたことに意義がある。以上、収集した欺瞞場面については、その一部を研究 2 で使用する。

(引用文献)

古屋健 1991 虚言行動に及ぼす個人特性の効果 社会心理学研究,6,165-174.

渋谷昌三・渋谷園枝 1993 対人関係における deception (嘘) 山梨医科大学紀要,10,57-68.

(2)研究 2 : 場面ごとにクロンバックの α 係数を算出した結果、0.75 から 0.83 の範囲内にあり、満足 of いく値であった。そこで、欺瞞度得点として、4 項目の単純加算を用いた (7 件法なので、取り得る値の範囲は 4 点~28 点である)。

最大の欺瞞度 (平均 18.11) を示したのは、場面 7 (店員と客のやりとりの場面) であり、最小の欺瞞度 (12.58) を示したのは、場面 1 (授業が始まる前の着席行動に関する学生同士のやりとりの場面) であった。参考までに全場面の基本統計量は表 2 の通りである。

表 2 場面ごとにみた欺瞞度の平均 (SD)

	欺瞞度の平均 (SD)
場面 1	12.58(5.11)
場面 2	17.00(4.67)
場面 3	13.34(5.12)
場面 4	15.50(5.39)
場面 5	16.29(5.51)
場面 6	16.43(5.12)
場面 7	18.11(4.60)

次に、上記各場面における欺瞞度の認知と個人差変数との関係について検討した。一般信頼尺度 6 項目についてクロンバックの α

係数を算出した結果、0.82 という満足のいく値が得られたため、一般的信頼得点として 6 項目の単純加算を用いた (5 件法なので、取り得る値の範囲は 6 点~30 点である)。

7 場面それぞれについて、欺瞞度得点と一般的信頼得点の相関係数を算出した結果、場面 1 は $r=-.16(n.s.)$, 場面 2 は $r=.07(n.s.)$, 場面 3 は $r=-.18(n.s.)$, 場面 4 は $r=-.27(p<.05)$, 場面 5 は $r=-.23(p<.05)$, 場面 6 は $r=-.08(n.s.)$, 場面 7 は $r=-.16(n.s.)$, であった。概ね負の相関を示しているという一貫した傾向はあるものの、値そのものは低く、有意な相関も少なかった。

これまでの欺瞞研究では、仮想的に構成された場面を用いることが多かったが、本研究のように、日常生活をもとに実際に収集した場面を用いたことに意義がある。

(3)以上 2 つの研究を経て、欺瞞性認知という観点から、日常のコミュニケーションの様相の一端を明らかにし、今後の欺瞞研究のための基礎的資料を提供できたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

①村井潤一郎, 対人関係のダークサイド (2) - だまし・暴力・抑うつ・浮気 -, 日本社会心理学会, 2008 年 11 月 2 日, かごしま県民交流センター

②村井潤一郎, 質的データをどう扱うか?, 日本心理学会, 2009 年 8 月 26 日, 立命館大学

[図書] (計 1 件)

村井潤一郎, 北大路書房, 対人関係のダークサイド, 2008 年, pp.17-28.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://piaget.hum.u-bunkyo.ac.jp/~murai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村井 潤一郎 (MURAI JUNICHIRO)
文京学院大学人間学部教授
研究者番号：50337622

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：